

## 左手書字者に対する毛筆指導のあり方について

On Instructing Left-handers in Japanese Calligraphy

芸術科書道 荒井 一 浩

### <要旨>

左手で毛筆を操ることは難しい。普段右手で書字をしている人にはなかなか理解されない。その要因はどこにあり、左手で書字を行う人に対してどのようなアプローチが考えられるのか。利き手の割合の変遷や利き手から見た漢字、仮名の文字としての構造を明らかにしつつ、左手で書字するときの問題点を探る。また、左手で毛筆を使用するときの工夫を考えた『左きき書道教本』を手がかりに、左手書字者の実践を踏まえて、今後の指導のあり方を考える。

<キーワード> 左手 利き手 書字 毛筆指導 左きき書道教本

### 1 はじめに - 左と右について

左と右の概念は複雑で理解が難しい。少なくとも日常生活においては、この重力に支配された世界に生きている限り、上と下で悩まされることはあまりないだろう。しかし、左と右は体勢を変えることで瞬時に逆転する。「探し物は君の右にあるよ」と言われて振り返った時には、その右に探し物はない。試みに手元にある辞書(1)を引いてみよう。

左 北を向いたとき、西に当たるほう。左手。

右 北を向いたとき、東に当たるほう。日本の道路の場合、車が走る側とは逆の側。右手。

この説明は、右と左の概念を説明するには、先に東西南北という方角に関する知識を得ていないとなし得ないということを意味している。また、当然ながら東西南北が存在しない、例えば北極点においてこの説明を適用することは困難である。それほど慣れ親しんでいるはずの左と右という言葉の意味を平易な表現で説明することすら往生してしまう。そして、その説明は「左手」「右手」を持ち出すことになる。実際、漢字の字源をさかのぼれば、「左」「右」はそれぞれ「左手」「右手」の象形を含んだものとなる。

さて、左と右を扱った古典的名著にマルティン・ガードナーの『自然界における左と右』がある。この本では、左と右をキーワードにして鏡、平面や立体、芸術、天体、動植物や人体などを考察し、さらに近年話題となったニュートリノまでを扱っている。その中に「少数派の左利き」と題した章があり、次のように始まる。(傍線は筆者)

この世の中は、多数派の右利きにとって都合のいいように出来ている。ということは、少数派の左利きにとっては、都合が悪く出来ているということに他ならない。(2)

ガードナーは、世の中が左利きの人にとっていかに不便であるかを、様々な観点から考察しているが、手書きについて次のように触れる。

強い左利きの子供にとっては左手で字を書いたり、画を書いたりするのが実に苦手である。書き終わったところを見直すのもむずかしいし、指で紙をよごさないようにするのもむずかしい。(3)

もちろん、後段の記述については、日本語による縦書きでは逆に右手で書字することで書いた部分を手でこすってしまうことになる。

ガードナーの指摘は多くの共感を得るところであろう。絵画はともかく、文字を書くことに限定して考えれば、第4章で触れるように文字(漢字や仮名)は「右利きにとって都合のいいように」成立していることはまぎれもない事実だからである。しかし、左手で書字をする必要がある人にとって、どのような配慮が必要かについて言及されたものはほとんどないと言ってよい。教育の現場では、あえて右手で書くように促されたり、左手で書きづらそうに書いていたりというのが実情ではなかろうか。そして、指導者は書きづらそうにしている学習者に対してほとんど何もできずに手をこまねいていたとは言えないだろうか。本稿では、書写書道に携わる教員と

しての立場から、利き手や漢字と仮名の字形について確認した後、1971年に発行された『左きき書道教本』の復刻版を手がかりに、左手書字者の現状を検証し、今後の指導の手がかりを探していくこととする。

## 2 利き手について

本稿ではタイトルに「左利き書字者」という文言は用いていない。利き手についての研究が始まったのは19世紀からと言われているが、まだ分からないことも多く、筆者もその全体像を掴むまでに至っていない。考古学の知見によれば、人類の歴史を200万年前くらいまでさかのぼれば、右利きが約59%で半数強<sup>(4)</sup>、さらに進化の過程をさかのぼると有為な差は見られなくなるという。そのおよそ3万年前、ネアンデルタール人が絶滅する頃には左利きが今とほぼ同数の10%程度になったと考えられるといい、前原勝矢氏によれば、少なくとも5000年前、縄文時代には今と変わらない割合に落ち着いていたという。<sup>(5)</sup>

利き手がなぜ少なくとも縄文の時代から変わらない割合で出現するのかは、医学的にも解明されていない。そして、この割合はその後の時代や人種、民族、性差などによって大きな差異は見られないともいう。もし、大胆な推量が許されるならば、左脳が言語を司るということからして、人類が言語を操るようになったことと関係しているのかもしれない。また、道具を用いるようになったこととも関係しているのかもしれない。

また、利き手というものは、「左」と「右」にきっちりと分かれるものでもないという。「両利き」と判断される場合もあるし、「左利き」といってもその強さに様々な段階が認められる。

利き手に関する複雑な事情と右利きの人が何らかの要因によって左手で書字をしなくてはならないという状況も考慮して、本稿では「左手書字者」という言い回しを選択した。

## 3 古代人の書字に使用された手

では、我々の先祖である古代の日本人の多くは本当に右手による書字を行っていたのだろうか。おそらくは紀元前後ころ中国から日本への漢字の輸入が始まった。『後漢書』の東夷伝に見られる建武中元二（57）年に光武帝が倭奴国王に「印綬」を与えたという記述に相当するとされる「漢委奴国王」印や弥生時代の遺跡からも多く発掘される「貨泉」や「五銖銭」などがその嚆矢となろう。その後、断続的に漢字の輸入は続いたと考えられるが、

日本人が漢字を獲得し、書字するには六世紀の仏教の伝来が大きく影響していると考えられる。律令国家の時代を迎え、文字を書く機会が飛躍的に増大し、国家事業として写経が行われているが、その書字がどちらの手を用いていたかを示す記録は見出せていない。もちろん、日本最古の肉筆とされ、従前は聖徳太子筆とされていた法華義疏や膨大に伝来する天平写経など残された文字の字形を観察することで検証することは出来るが、ここでは別の観点から見てみたい。

「広目天」という仏神がいる。持国天、増長天、多聞天とともに四天王の一に数えられるが、その広目天の持物が毛筆と巻物である。下の写真は国宝にも指定され、7世紀中頃に造られたとされている最古の広目天（法隆寺蔵）であるが、右手に毛筆を、左手に巻物を持っている。広目天は平安時代以降持物が変わるが、天平時代に造られたものは毛筆と巻物を持ち、毛筆は必ず右手に持っている。

この部分は  
公開に適さないため  
掲載できません。



次に、絵巻物で見てみよう。管見の及ぶところ、12世紀と多少時代は下ってしまうが、絵巻物の中で毛筆を用いている最古の例は『信貴山縁起絵巻』に見られる。僧侶が娘に難波津の歌を書いてみせているところだというが、娘は食い入るようにその手元を見つめている。ここでも僧侶は右手で毛筆を持ち、左手に持った料紙に書き進めている。因に広目天、『信貴山縁起絵巻』ともに執筆は単鉤法を用いている。

この部分は  
公開に適さないため  
掲載できません。

他、14世紀と言われる『法然上人伝絵巻』に残されている毛筆使用の場面や伏見宮貞成親王が書写させた『看聞日記』の応永23(1416)年11月1条に残された小野道風像など、いずれもが毛筆を右手に持っている。対して、左手に毛筆を構えているものを見出すことは出来なかった。このことは、文字を書く手として右手が認識され、実際にも右手によって書字が行われていたことが多かったことの証左となるのではないだろうか。

#### 4 文字の姿態から観察する

我々が日常の書字に用いているのは、漢字仮名交じり文である。つまり、主に用いているのは「漢字」と「仮名」ということになる。まず、漢字から観察してみよう。



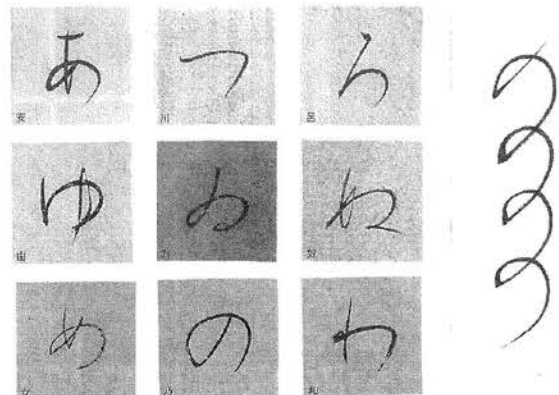
左下図は毛筆で書字した楷書の「大」字を双鉤したものである。ここで二つの質問を設定してみよう。

- 問1 なぜ、第一画の横画は右上がりの形状をしているのだろうか。
- 問2 なぜ、右払いと左払いは形状が異なっているのだろうか。

漢字の祖先を尋ねていけば、横画は右上がりになっていない。篆書、隸書の時代はその基本構造として横は水平を基調とする。しかし、3世紀くらいから楷書に移行してくると徐々に横画は右に上がり始め、隋唐に至って現在我々が見るような字形に落ち着いた。これは、右手の書字者が逆入せずに自然に起筆し、自然に運筆した結果であると言えることが出来る。つまり、右手を自然に身体の正面に移動させれば、図で見る起筆の角度と同じくらいの角度を示すだろう。そして、ことさら力を加えずに水平に右に動かせば、右手は身体から離れていく。筆記具を持ってこの運動をすれば、その線(画)は右上がりの形状を示すことが理解できる。「大」字を右手で書字するのは合理性を保っているが、これを左手で書こうとすると本来と逆の動きをしなくてはならず、不都合極まりないということになり、起筆の角度を逆の斜めにして右下がりに書く方が理にかなっているということになる。

払いはどうだろうか。右手で書字をすれば、左払いの方には障害や抵抗はないから、スムーズに払うことができる。ところが、右払いを書こうとすると細字なら指の関節が折れ、大字なら肘が折れていくだろう。この折れを解放する動きが右払いにおける形状を生み出している。横画と同じように、左手書字者にとっては右払いを滑らかなカーブを描くように、左払いをくの字型に折れて書く方が理にかなっていると言える。

次に、仮名を観察する。



図版は平安時代の仮名古筆(6)から集めてきたものだが、右手で書字するときに書きやすい右回転の運筆が多いことが見て取れるだろう。左回転のものは「と」などに限られている。「は」「ほ」「ぬ」「る」などに見られる結びもすべて右回転で結ぶ。また、漢字でもそうだが、文字の左上で始まり、右下で終わることが多く、右手の書字では書き進める過程を確認しながら書字できるのに対し、左手では書いた部分が自らの手によって隠れてしまうことが多い。

当然のことだが、漢字にしても仮名にしても誰かが意図的に成立させた訳ではない。前章までに見てきたように言語が発達し、文字を獲得していく時代には、既に利き手において圧倒的な差異が認められており、その中で醸成されてきているのである。換言すれば、数的に右手優位の社会において書字が繰り返されることによって「右利き(右手による書字)」にとって都合のいいように」運筆のリズムが形成され、字形が作り上げられたと言うことができる。

このようにして現在我々が使用している文字は出来上がっているのであるが、反面それによって左手書字者が置かれている状況も無視できない。問題の所在は、運動のリズムがまったく反対に展開していること、そして特に書字した部分が隠れるか否かが大きい。

## 5 本校における左手書字者に対する毛筆指導

ここで、本校における左手書字者に対する毛筆指導をどのように行ってきたかを明らかにしておかなくてはならない。ほとんど指導をしていないとお叱りを受けそうだが、以下列挙する。

＜全体に対して＞

- ・第4章で考察を加えたことを、簡潔にまとめてレクチャーしている。つまり、文字の成り立ちを踏まえて、漢字や仮名が右手で書字するのに合理的に形成されていることを理解するようにしている。

＜左手書字者に対して＞

- ・右手で書いた方が良くと尋ねられることもあるが「自分で書きやすいと思う方で書きなさい」と指導している。
- ・硯や筆架などは通常と対称的な位置に配置するようにしている。
- ・教材は半紙の右側、ないしは上部に置くようにしている。
- ・左手で書字することには無理が生じることを理解するようにしている。

- ・自分なりに書きやすく工夫できることがあれば、積極的に実践するように促している。

- ・右手書字者と二人で並ぶ場合は書字する手が重ならないように配慮している。

- ・ときには指導者(筆者)が左手を用いて書字する姿を見せている。指導者(筆者)は右手書字者である。

基本的には、高校生という発達段階や、小・中学校での学習体験を重視する必要があると考えている。合理的だからという理由だけで、それまで行ってきた行為を転換させることには、その根拠の脆弱さもあって慎重にならざるを得ない。

## 6 『左きき書道教本』について

『＜復刻版＞左きき書道教本』(以下、『教本』と呼ぶ)は、インターネットの通販サイトで左利き用の用品も扱っているフェリシモ(7)で購入することができる。全20ページほどの冊子で、編集は「フェリシモ左きき友の会」となっている。



この原本は1971年から1975年まで活動していた「左きき友の会」(8)の精神医学者の箱崎総一氏と小学校教諭の細川芳文氏によって作成、普及されていたことが前文に記されている。ただし、残念なことにこの『教本』の存在を知っている者は今回の協力者には一人もいなかった。

はしがきの原文は当時のまま掲載されている。以下、一部を引用する。

がんらい書道は、わが国に古くからある伝統芸術です。その筆法や運筆の手じゅんなどについては多くのきめごとがあります。たとえば、左手で筆を持てはいけないというのもその一つです。

そのために書道を習うさいや、ペン字を習うさいにはほとんどの場合、左利きの人たちはぜんぶ右手で書くように無理に矯正されてしまうのが従来の方法でした。

左利きの人を右利きに矯正することでさまざまなストレスが発生します。ことに小学生ではこのストレスの程度がはげしくおこってきます。(以下略)

この文章が書かれたのは1971年で、今から40年以上前のことであるから多少事情は異なるかもしれない。加えて、補章2「書道教育と左きき筆法」と題したところでこうも述べている。

「左きき友の会」ではこの左きき筆法を発表する前にいくつかの書道団体や、書道家の人たちに左手で書道を学ぶという点について質問をしました。しかしその返答は残念ながら例外なく冷たい返事しか返ってきませんでした。その返答はだいたい次のようなものでした。

「左手で書いた書家は誰もいなかった」

「左手を矯正して書道を教えている」

「左手で筆を持つことなどできるはずがない」

(以下略)

このような回答をする方ばかりではないと信じたい。しかし、本当に「例外なく」このような回答であったのなら、誠に残念だ。

まず、筆者は書写書道を専門としているが、寡聞にして「左手で筆を持つてはいけない」という決めごとがあるという話は聞いたことがない。ただし、第3章で検討した通り、左手書字には無理が生じることは事実であるから、それがいささか誇張されているのかもしれない。「左手で書いた書家は誰もいない」についても、知人で左手書字をして書道に携わっている人がいるし、『硯史』を著した高鳳翰は病で右手が使えなくなったとはいえ、左手で歴史に残る書を書いている。ただしこれも割合からすれば極めて少ないので断定的な表現になってしまっているのだろう。

ここで一番問題とされなければならないのは「矯正」ではないだろうか。「矯正」という言葉の意味は、「欠点を直し、正しくすること」とあるから、そこには「左利きは正しくない」という考えがある。しかし、左利きは個性の一つであるというように考えてよいのではないだろうか。『教本』の中でも、矯正が大きなストレスを生み、精神的な不安定や性格への悪影響が現れると指摘している。さらに、神経心理学が専門で、利き手に関する著書のある八田武志氏は、カナダのボラックらの研究(9)を紹介した後、次のようにまとめている。

上手くきき手の変更できるか、やってみなければ分からないではないかという向きもあろうが、それはそのとおりで、だから無理に変えようとししないほうがよいという私の結論が導かれるのである。(10)

こうして見ると、矯正にはリスクがつきまとい、特に毛筆を用いて書字をするまでに発達段階を過ぎたことを考えれば、たとえ小学校3年生(11)であっても利き手を尊重していくことが大切であると考ええる。

## 7 姿勢と筆の持ち方

さて、本章より、『教本』に従い、左手書字を行う7名の協力者の実践とアンケートを下に論を進めていきたい。

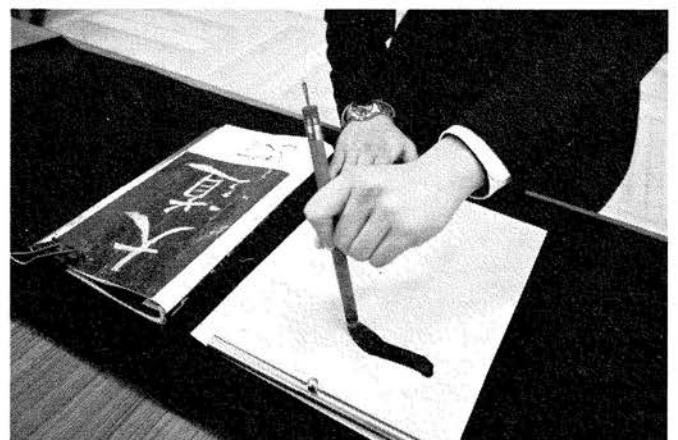
協力者のうち6名は高校生(男3、女3)、1名が若手教員(男)である。『教本』では「姿勢と筆の持ち方」について次のように説明する。

左手で筆を持って書道を習うさいの姿勢は基本的に右手の場合と同じです。

筆先と紙のなす角度を右手の場合と同じように左手の角度を傾けてください。

この角度は非常に大切です。それは筆先が15度ないし20度ぐらい傾いていないと筆の毛がササクレたってしまい、上手な字が書けなくなってしまうからです。

これは、右手で書字をするときにやや進行方向に筆管が傾くことを言っている。ごく自然に左手で書字すると進行方向とは逆に倒れるので書きづらく感じてしまうので右手書字のときと同じ角度に保つということである。





この方法では、7名のうち6名が書きやすかった、と答えている。普段からこのように倒して書いていると答えた者も2名いたが、今回新たに組み込んだ者からは、「穂先の入りと終わりがしっかりと書けている感じで書きやすかった」「いつもより横に楽に進められた」「書き始めが入りやすかった」という感想を得た。1名「むしろ普通の角度の方が書きやすかったです」という感想は若手教員のもので多少年齢も関係しているのかもしれない。

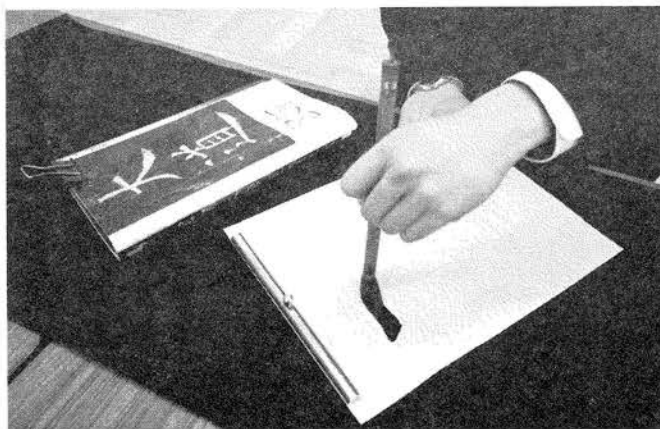
## 8 斜めがき筆法

斜め書き筆法の説明は次のようである。

左手に筆を持って習字をするとき8図（筆者注 写真のように斜めにずらすこと）のように紙の位置を斜めにずらして書くと非常に書きやすくなります。そのさい紙を約45度ぐらい傾けるのが適当ですが、もう少し角度を変えて置いてもかまいません。それはその人の書きやすい角度を見つけてください。

『教本』では、この書き方の利点を「筆毛が乱れ」ない、「紙がヨジレ」ないことをあげているが、そればかりではないだろう。左手書字者が書いているところを観察していると、書いた部分がよく見えているだろうことに気付く。文字を書く、つまり点画を組み合わせていくということは、前に書いたところが確認できることが必要である。例えば、前述した「大」字で言えば、第一画を書いた後に第二画を書くとき、第一画との位置関係で書き始める位置を決めているはずだ。第一画と交差する位置も予想しているということになるだろう。こう考えれば、書いた画が確認できないということは不安で仕方ないと思われる。

また、書いたところを確認したいという欲求は、視点を動かすということにつながってしまう。通常の姿勢で確認できなければ、覗き込もうとすることで姿勢を崩すことになる。



実践の結果、肯定的な意見が2名、否定的な意見が5名だった。また、肯定した2名はいずれも女子であった。「いつもより楽に書けた」「鉛筆で書くとき傾けて書いているから、自然だった」という一方、「角度の感覚がつかめず、変な方向に行ってしまった」「逆に正面からの完成図を思い描くのが難しいし、筆の入り書きにくい」という意見もあった。確かに、左手書字者が硬筆で書字している際、用紙を右に斜めに傾け、腕を大きく湾曲させ抱え込むようにして書いている姿を目にすることがある。

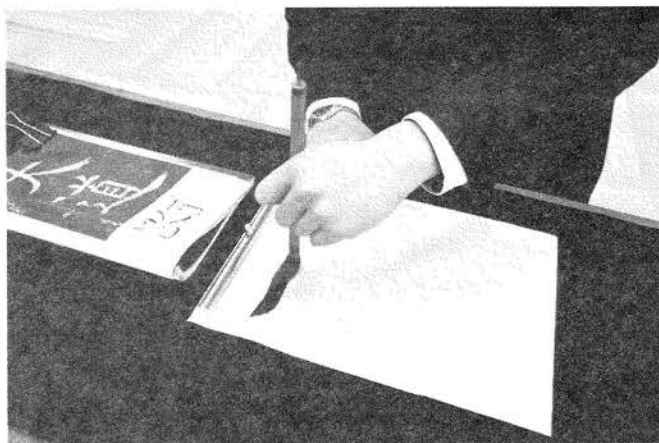
## 9 横がき筆法

説明は次の通り。

横がき筆法は13図（筆者注 写真のように紙を置くこと）のように机のヘリと紙の位置が並行になるように置きます。

横がき筆法の場合、左から右へ引く線は、上から下へ引く線に変わります。

これは基本的には「斜めがき筆法」の角度を大きくしたものと考えられる。「斜めがき筆法」が斜めの角度によってどの程度考慮しなくてはいけなさを判断しにくかったのに比べて、90度右に回転しているので水平が垂直に転換しているのが捉えやすいかもしれない。



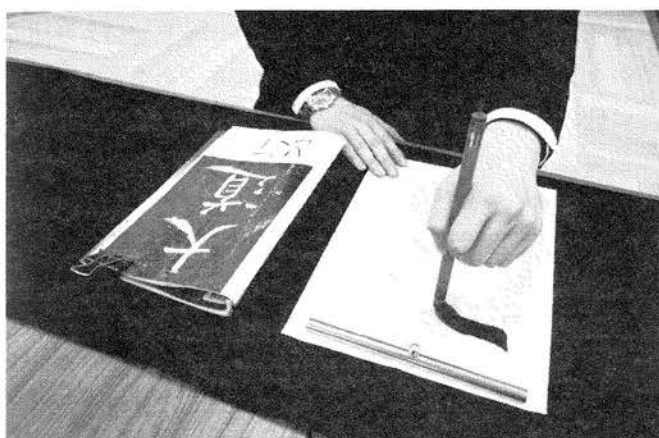
ところが、この方法を試してもらったところ、7名全員が否定的であった。「絶対無理」「すごく書きづらい(字よりも図形を書いているみたい)」など抵抗感が非常に強いと感じた。「横画を縦画の感覚で書くことはできず、むしろ変に意識してしまった」という意見もあった。『教本』では「左から右へ引く線は、上から下に引く線に変わります」「すると左手で非常に書きやすくなるのです」

と説明されているが、反対に「手前にくる線が特に書きにくい」という意見もあった。

## 10 正座筆法

次のように説明される。

正座筆法は右手書きの場合と同じに紙と机のへりとを90度の角度にして習字をする方法です。ただここでちがっている点は紙を置く位置です。14図（筆者注 写真のように）に示したように紙は体の中心線から左側へずらして置く必要があります。



この方法での反応は、肯定的な者が4名、否定的な者が3名という結果で、意見が別れた。今までの中では肯定派が最も多いということになった。肯定派としては「いつも左から右に書く際に、右腕の右側まで持っていかなければならず困っていたので、余裕ができて助かりました」「画の終わりまですべてが書きやすい」「手元がとても見やすかった」といった意見が出た。左手書字による無理な動きが軽減されたこと、書字した部分が隠れにくくなったことが「書きやすい」という言葉になったと捉えられる。

それに対し否定派の意見としては「上二つに比べるとマシだが、正面で書いた方がよい」「字のバランスが见づらい」「あまり普段と変わらなかった」というものだった。「上二つに比べると」というのはある程度この書き方を受け入れながらも、今までに正面において書くことを続けており、それに慣れているということであろう。今回の実践は継続的に行っている訳ではなく、突然のお願いだったため、その戸惑いもあったかもしれない。「字のバランスが」というのは、自分の書いたものを斜めから視認することになるため、どうしても歪んで見えてしまうということだと考えられる。

## 11 実践を終えて

本稿での実践は『教本』を手がかりに進めてきた。結果、いくつかの方向性が見えてきたのではないかと考えている。ただし、誤解を生じさせてしまっているのではないと思うので、断っておきたいのだが、ここで取り組んだことは『教本』の内容を否定しようというものではない。『教本』は小学校教諭であった細川芳文氏に関わってその方法論を示したように、主なターゲットを小学生にしている。小学校、特に低学年においては書字に関する経験が少ない分、様々な条件に対して柔軟に対応することが可能だろう。実際に小学校で実践された結果、児童の反応も記載されている。【こどもたちの声】として挙げられているのは次の4点である。

- \* 筆の軸が自然に傾くから書きやすい。
- \* 起筆や終筆や運筆が右ききと同じようにできる。
- \* 紙を斜めにすると、手本も斜めにした方が手本に従いやすい。場所はとるが。
- \* 筆が左から右へ移動するとき、左手のコブシが邪魔にならなくてよい。

これらの言葉は、第4章で筆者が問題と指摘した運動のリズムと書字した部分が隠れることと重なっている。

本稿で目指したのは、中学校までにそれといった学習指導の工夫をされてこなかった高校生という発達段階の生徒が、どのように感じ、もしこの段階で取り組めるとしたらどのような方法が考えられるのか、ということを示すだけでも明らかにしたいということであった。

高校生にもなると、今までにより書きやすくする為の工夫をいろいろと試みてきているようだ。「今までに左手で書字（毛筆）する際に気をつけたことはありますか？」という問いには、「体を横に傾けて書きやすくする」「持ち方を工夫している」「できるだけ、一画一画確かめながら書く」といった答えがあった。『教本』では用紙を斜めや横に配置して書くことを提案しているが、自分の身体を傾けることによって、おそらくは同じような状況を生み出しているであろうことが想像される。

## 12 おわりに—今後の課題を含めて

協力者の反応と記述を踏まえて結論を言えば、共通して効果が期待されそうなのは、用紙を自分より左にずらして書く「正座筆法」と呼んでいるものだと考える。この書き方は、自然に行えば、第7章の「姿勢と筆の持ち方」で取り上げた筆管が右に15度から20度傾くという

状態になりやすい。しかも、書字した部分が隠れる範囲を軽減することができる。右手書字に比べての明らかな欠点は、書いた文字を正対して観察できないことだ。しかし、利点もある。右手書字の場合、書いた文字は正対して見ることができるが、逆にいわゆるお手本は斜めに見ていることになる。左手書字でこの方法を取れば、写真からも明かなように、お手本をほぼ正対して観察することができるだろう。書き終えた成果を正対して確認することを習慣づければ、良い方法として定着が望めるのではないだろう。

また、今回の実践による検証は、毛筆を運用しやすい、つまり書きやすいということだけを判断の規準においている。当然ながら書きやすいということがなければ、手書き文字を体験的に獲得していくための教具としての役割は果たせないだろう。毛筆を用いて書くことに興味がわき、楽しいと覚えることがなければ、継続的に取り組んで成果を期待することはできないからである。一方、何のために毛筆を用いた学習をするのかという観点も忘れてはならない。小学校のように手書き文字を獲得していく段階、いわゆる書写の段階では硬筆を用いた書写の力への転移も考える必要がある。書写の大きな目標の一つに掲げられる「日常に生きて働く書写力」である。毛筆を運用していくときに工夫したことが、硬筆で書くときにどう生きていくのかを検証していく必要があるだろう。

高校生のように書字の経験が豊富な発達段階に至っては、普段の硬筆を用いた書字との関連を探っていくことも必要であると考え。その共通点と相違点を明らかにしていくことで、毛筆という筆記具の新たな側面が見えてくることにもなると期待される。

本稿を草するに当たり、熊木孝太先生をはじめ、書道選択者の左手書字者である梅田菖、北村和樹、黒目大雅、小関仁貴、末光ひかり、原祐菜の諸君の協力を得た。記して謝意を表す。

#### 【注】

- (1) 福武国語辞典, 樺島他, ベネッセコーポレーション, 1989
- (2) Martin Gardner『自然界における左と右』坪井・小島訳, 紀伊国屋書店, 1971, p115
- (3) 前掲書, p119
- (4) Schaller, 1963

(5) 前原勝矢『右利き・左利きの科学』講談社, 1989, p17. 表 1. 1

「過去 5000 年の芸術に見る右手利きの頻度」による。

(6) 「為」は粘葉本和漢朗詠集から、他の文字は高野切本古今和歌集第三種から集字した。いずれも 11 世紀の書写と考えられる。

(7) <http://www.felissimo.co.jp/>

(8) この「左きき友の会」は「フェリシモ左きき友の会」とは別の組織である。

(9) 八田武志『左対右きき手大研究』化学同人, 2008, pp. 193 - 196

この中で、左ききで左手書字であったのを両親に変更させられたが失敗して現在も左手書字をしている集団の生活満足度や健康度が統計的に差を認められるほどに低いことを紹介している。

(10) 前掲書, p. 196

(11) 現在の学校教育では、小学校 3 年生より毛筆書写を扱うこととなっている。